

## 澳門出土の肥前磁器

野上 建紀

(共同研究者・研究協力者)

澳門博物館：薛 啟善 陳 志亮

澳門藝術博物館：陳 炳輝 趙 月紅 盧 大成

洪 曉純 盧 泰康 黃 慧怡

### 1 はじめに

筆者らは2005年5月19日から24日の日程で、澳門における陶磁器調査を行った。調査を行ったのは澳門博物館(Museu de Macau)所蔵の遺跡出土陶磁器及び採集陶磁器、澳門博物館展示品、澳門藝術博物館(Macao Museum of Art)所蔵中国磁器、仁慈堂博物館(The Museum of the Holy House of Mercy of Macao)展示品及び澳門在住の潘國雄氏所蔵の個人コレクションなどである。

### 2 澳門出土の肥前磁器

モンテ砦(Monte Fortress)遺跡の出土遺物の中に肥前磁器片を5点確認した。モンテ砦は聖ポール天主堂に隣接して17世紀に築かれた砲台である(Figure.1・2)。完成は1626年であったが、その4年前の1622年にはその砲台の大砲でオランダ艦隊を撃退したという。確認した肥前磁器は染付碗(鉢)3点、染付髹皿2点である(Figure.3)。染付髹皿は同種のもので同一個体である可能性がある。Figure.3-1の染付碗は外面に松文、梅文が描かれる。文様の配置構成から欠損部分に竹文があった可能性がある。そして、見込みに梅文、高台内に「太明」銘が入る。生産年代は1650～1670年代と推定される。Figure.3-2は大振りの染付碗(鉢)であり、外面主文様については不明であるが、見込みに花卉文、高台内に「太明」銘が入る。生産年代は1650～1670年代と推定される。Figure.3-3は染付碗の口縁部である。文様は山水文であろうか。Figure.3-4・5の染付髹皿については天狗谷窯で同様の文様をもつ髹皿片(Figure.4)が採集されているが、表面採集であり、同窯で生産されたものであるかどうか不明である。生産年代は1670～1700年代と推定される。また、類似した文様の髹皿(Figure.5)がエルミタージュ美術館に所蔵されている(国際日本文化研究センター1993,p183-figure.973)。赤、金で上絵付けされたものである。一般的な髹皿は半月状に切り取られた口縁の反対側に二つの孔があげられているが、同コレクションの髹皿は半月状に切り取られた部分の



Figure.1 Monte Fortress 位置図  
(Museu de Macau1999,p71より作成)

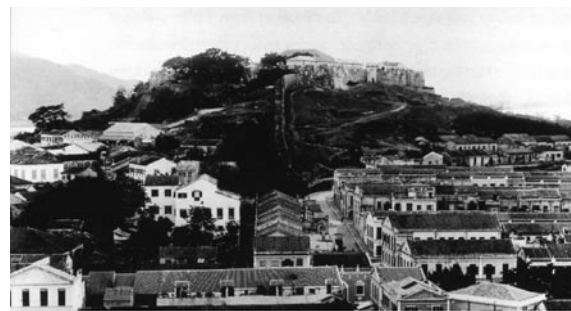


Figure.2 Monte Fortress  
(Museu de Macau1999,p60より転載)

脇にもうけられている。モンテ砦遺跡出土の染付髹皿の破片の一つがその箇所のものであったが、孔を確認することはできなかった。また、大橋康二氏よりエルミタージュ美術館所蔵の髹皿と同種のものがオランダの個人コレクションの中にもあるというご教示を受けた。孔の位置も同様である。図録に掲載されているモノクロ写真(Figure.6)を見ると、上絵付け装飾が施されていることがわかる。エルミタージュ美術館やオランダの個人蔵の髹皿の生産年代は1680～1700年代と推定され、天狗谷窯採集製品よりはやや年代が下がる可能性がある。

### 3 討論

澳門はポルトガルのアジアにおける交易拠点であった。ポルトガル人は1556～1557年頃に中国の明朝と賃貸契約を結び、澳門は交易拠点として東・東南アジア交易圏における最も繁栄する地点となった(岡2002)。その繁栄を支えたものの一つが澳門-長崎間

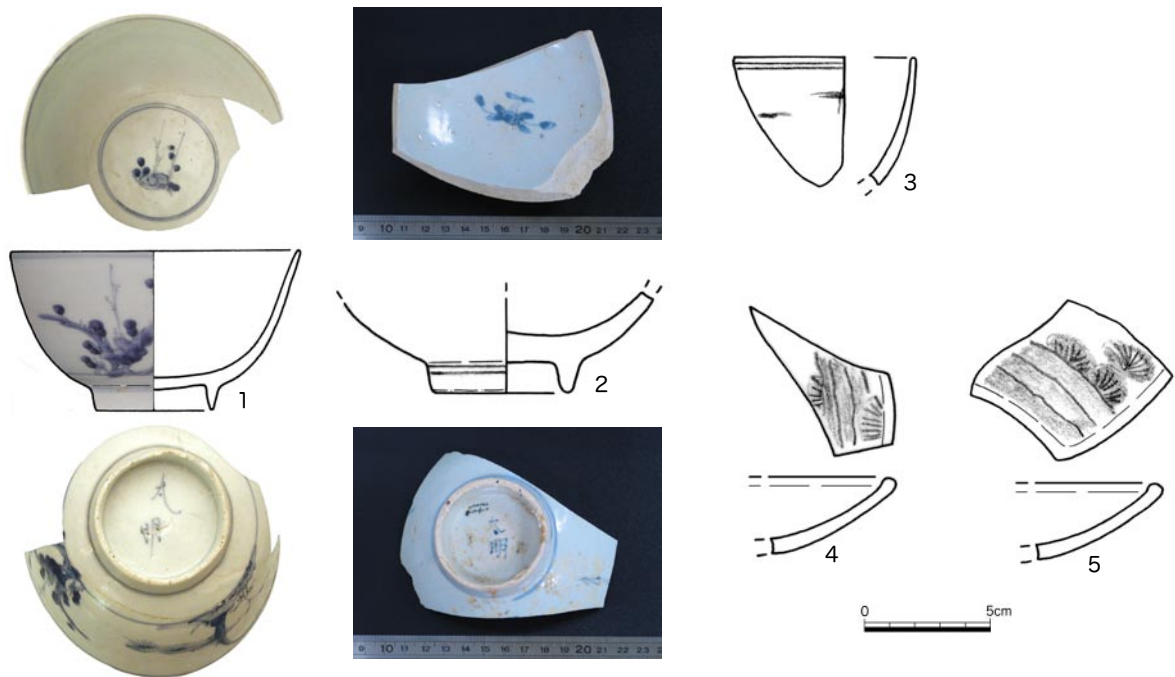


Figure.3 Monte Fortress 出土肥前磁器 (Courtesy:Museu de Macau)

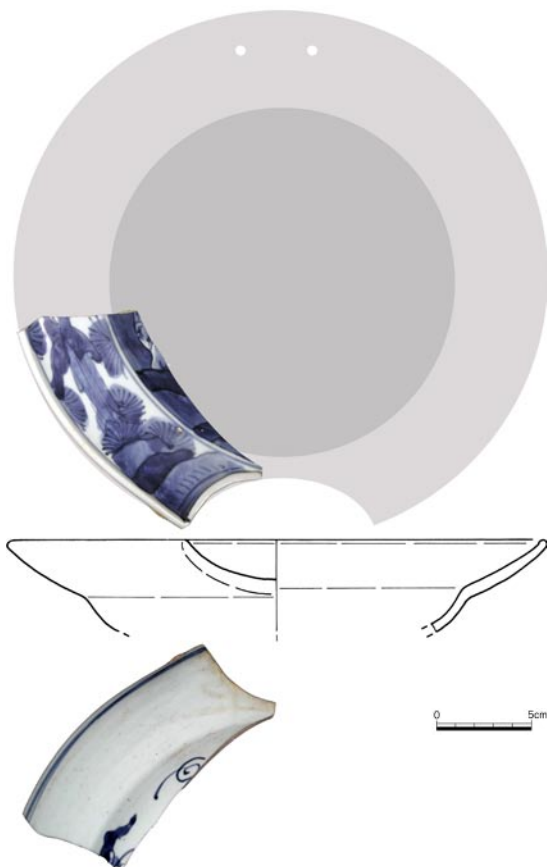


Figure.4 天狗谷窯跡採集染付髷皿



Figure.5 エルミタージュ美術館所蔵染錦髷皿  
(国際日本文化研究センター 1993,p183 より転載)



Figure.6 個人所蔵染錦髷皿 (オランダ)  
(Mededelingenblad nederlandse vereniging van vrienden van de  
ceramiek 101/102 1981 より転載)

の生糸・銀貿易であったが、1639年（寛永16年）に江戸幕府による鎖国令が徹底され、ポルトガル船の日本来航が禁止される。岡美穂子は日本との交易断絶後、澳門存続の救済策はマニラ交易のみとなるが、澳門とマニラの交易は禁じられていたため、澳門政庁はポルトガル国王宛にマニラとの交易を再開する許可を再三求めなければならなかったとする。そして、銀の入手が困難になるとともに、中国人が台湾に抛るオランダ人との交易に興味を示しはじめたことから、澳門はさらに弱体化への道をたどることになるという（岡2001）。港市澳門にとって、その黎明期と位置づけられる16世紀中葉から17世紀中葉が最も繁栄を享受した時代であったのである（岡2002）。澳門の各博物館に残る陶磁器もまたその時代のものが多く、その繁栄を物語っている。

一方、今回、澳門で発見された肥前磁器の生産年代はいずれも17世紀後半であり、繁栄を極めたその黎明期以後の製品である。また、日本とポルトガルの交易断絶後の製品であり、これらがどのような過程を経て澳門にもたらされたものか現段階では明らかではないが、17世紀中葉以降において弱体化したとは言え、澳門が当時の海上交易ネットワークの結節点の一つであり続けたことは文献史料などから明らかである。

まず、フォルカーの著『磁器とオランダ連合東インド会社』（前田正明訳）から、17世紀後半における澳門に関する記述を抜き出してみる。

〔1665年〕「十二月二日、シャムから三月二十八日にポルトガル船が粗製磁器（中国製）を積んでマカオ（澳門）から当地に到着した、と報じている。」（フォルカー連載38-54p）

〔1669年〕「マカオ（澳門）から来た中国のジャンク船には上質の中国製の磁器40箱の他にティー・カップ20,000個とティー・ポット650個が積まれていた。」（フォルカー連載43-63p）

〔1670年〕「マカオからは「ノストラ・セニョーラ・カスプロタス号」という名の知れたポルトガル船が40コージ（800個）のカップと60束の鉢とティー・ポット、それにバンタム経由で5,090枚の「マカオ・プレート」、5,100枚の「マカオ」のティー・プレート、4,000個のティー・カップ、150個のティー・ポット、200個の、多分広東焼と想われる施釉ポットを運んで来た。」（フォルカー連載43-p64）

〔1671年〕「別のポルトガル船「ノストラ・シニョーラ・ナザレット・アントニオ号」が15樽の上質の小さなティー・ポットを積んで来たほかに、さらに別のポルトガル船が2,000束のさまざまな磁器と200樽の上質のティー・カップとソーサー、それに1,000枚のプレートと皿を—いずれもマカオから—積んで入港

した。」（フォルカー連載43-p64）

〔1677年〕「マカオからは磁器1箱、ティー・カップ2樽、小振りのカップ1樽、小鉢1,000個、ポベゲット2箱が、（中略）入港した。」（フォルカー連載44-p58）

〔1678年〕「マカオからは、皿300個と「月末に詳しく記される」とあるが実際には忘れられていた船荷と、そのほかティー・ポット3樽、施釉ポット（多分広東焼）1,596個と磁器591個が到着した。」（フォルカー連載44-p59）

「また、1艘のポルトガル船が多量の磁器を積んでマカオから到着したと伝えている。」（フォルカー連載44-p59）

〔1680年〕「マカオから2艘の小型船が磁器を入れた大箱90個と、梱包していないままのプレート150枚、それに200樽分の磁器のカップ（中国製）を積んで入港する予定である。」（フォルカー連載40-63p）

「マカオからは、ティー・カップとソーサー25樽、小振りのティー・プレート400個、大小のカップ200個が到着し、さらに彫り文様のついた朱泥のティー・ポット320個、小振りの緑色の宜興窯のポット200個、さまざまな種類のカップ9,400個、粗製のプレート350枚、ティー・プレート6,600枚、小振りのカップ26,800個がバタヴィアに到着している。」（フォルカー連載44-p60）

これらの記載は清朝の海禁政策下、澳門からバタヴィアへ唐船やポルトガル船が磁器を積んで運んでいたことを示す資料である。産地を記したものは推定も含めていずれも中国製とされている。実際にそうであるかどうかはわからないが、澳門が中国磁器の輸出において有利な地理的位置にあることは確かである。

また、1673年の記述も興味深い。「マカオに近いランパコで彼ら自身の自衛のもとで多数のオランダの〔自由〕船と中国のジャンク船が碇をおろし、かれらは広東から来る中国系タタール人と取引している。中国皇帝は、自国の船舶や中国人に外国との貿易をかたく禁じているにもかかわらず、名目上彼らはマカオに来ていることになっていて、実際には、マカオに近いランパコまで出かけているのだ。」（フォルカー連載44-56p）とある（Figure.7）。これについては、「国姓爺（鄭氏）の軍は今や厦門と金門島を支配してしまったので、このために、中国沿岸では磁器を入手することは容易ではなかった。したがって〔自治区市民〕の船やバタヴィア—中国の船ならびに土地の船など個人所有の船がマカオ水域に向けて出かけてゆき、同地で磁器の売買した。」という事情がある。前掲した記述はこのことに対する不満を澳門のポルトガル政庁がバタヴィア総督に表明した内容である（フォルカー連載44-56p）。こ





Figure.7 澳門・ランパカオ位置関係図  
(澳門海事署 1986 より転載)

のことについて澳門の地理的位置や背景から澳門水域で売買が行われた磁器は中国製の可能性が高いと考えたのであるが(野上 2002b)、今回の発見によって肥前製の磁器も含めて考える必要があるように思える。

そして、今回は肥前磁器について、17 世紀後半のみの発見にとどまったが、18 世紀の肥前磁器のマカオへの輸出について、山脇悌二郎がオランダ商館日記の記述を紹介している。すなわち、オランダ商館日記(商館日記 1719 年 11 月 16 日条)には、清朝が 1717～1723 年にかけて再度の海禁を行った際、唐船が毎年多量の伊万里焼、特に「受皿付茶碗」(thee goet)を澳門・広東に輸出したと記されている(山脇 1988)。

一方、日本側の記録である「積渡寄帳」をみると 18 世紀前半には大量の「猪口(ちよく)皿」をオランダ船が輸出していることがわかる(山脇 1988)。藤原友子はこれら「猪口皿」が猪口と皿つまりカップとソーサーを意味する可能性を指摘しているが(藤原 2000)、妥当な指摘であろうと思う。ヨーロッパのアムステルダム市内遺跡でも数多く肥前磁器のカップとソーサーが出土している(Jan M.Baart 2000)。もっとも 18 世紀におけるヨーロッパ船籍の沈没船資料や交易記録をみると、大量の中国磁器のティーウェアを積載していたことがわかる。例えば 1752 年に沈没した Geldermalsen 号の場合、陶磁器の 70% 以上をティーウェア(コーヒー・ココア用を含む)が占める。また、1758 年度の陶磁器製品の請求をみると、陶磁器 547,650 点の内の 55% 程度をティーウェア(コーヒー・ココア用を含む)が占める(野上 2001)。茶自体が当時の積荷の主たるものの一つであったことを考えると、まさに 18 世紀の東西航路は茶の道であったのである。そのため、清朝が再海禁を行うと、中国磁器が出にくい状況となり、オランダ船だけでなく、唐船もまた肥前磁器のカップとソーサーを運ぶことになったのであろう。

この時期のカップとソーサーと推定されるものが赤絵町遺跡(佐賀県有田町)、上福 2 号窯(佐賀県塩田町)

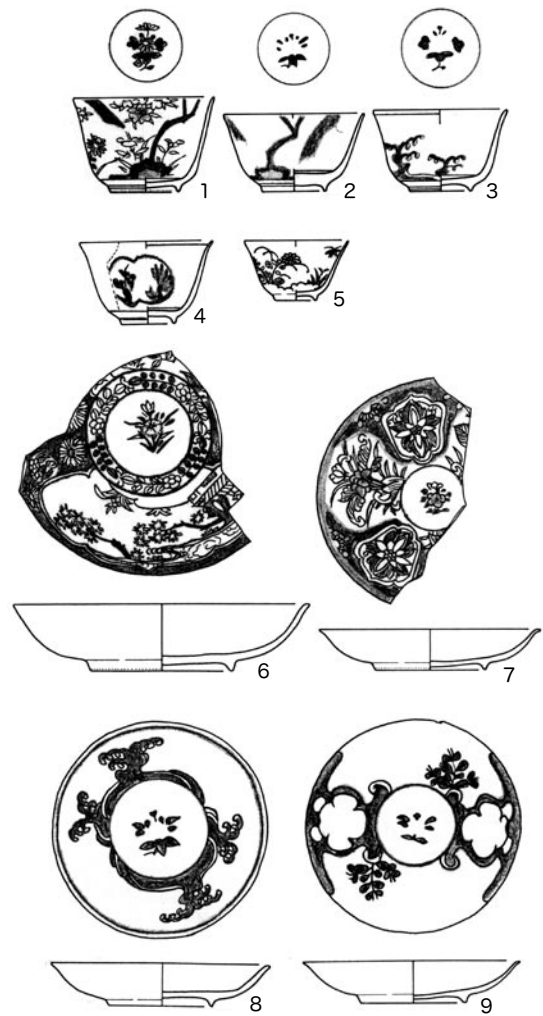


Figure.8 赤絵町遺跡出土カップ&ソーサー

などで出土している。赤絵町遺跡出土のカップとソーサー(Figure.8)は 1710～1740 年代のものと推定され(野上 2000)、上福 2 号窯の操業年代は 1730 年代頃と推定されている(塩田町教委 1998)。今後、これらのカップとソーサーが澳門・広東で発見される可能性があると考えられる。

#### 4 おわりに

今回の事例は、澳門で初めて考古資料としての肥前磁器が発見された事例というだけではなく、中国の大陸側で初めて発見された事例でもある。現段階では肥前磁器の発見が中国の大陸側の一般的な一交易拠点としての性格を示すものか、あるいはポルトガルの居留地という特殊性を示すものか判断することができない。今後、澳門の他、厦門や広東など中国大陸の交易拠点への肥前磁器の流入について調べていきたいと考えている。

## 謝辞

今回の調査に際しては多くの方と機関のご協力を頂いた。芳名を記して謝意を表したい。

呉衛鳴（澳門芸術博物館総館長）、潘國雄、澳門芸術博物館（Macao Museum of Art）、澳門博物館（Museu de Macau）（敬称略、順不同）

この研究は平成 17 年度高梨学術奨励基金より研究助成を受けて行った。

## 《参考文献・引用文献》

- 有田町教育委員会 1989『赤絵町』  
Edward P.Von der Porten 2001'Manila Galleon Porcelains on the American West Coast'TAOCl no.2  
大橋康二 1985「鹿児島県吹上浜採集の陶磁片」『三上次男博士喜寿記念論文集』陶磁編 平凡社 p275-291  
大橋康二 1990「東南アジアに輸出された肥前陶磁」『海を渡った肥前のやきもの展』佐賀県立九州陶磁文化館 p88-176  
大橋康二・坂井隆 1994『アジアの海と伊万里』新人物往来社  
大橋康二・坂井隆 1999「インドネシア・バンテン遺跡出土の陶磁器」『国立歴史民俗博物館研究報告』82  
岡美穂子 2001『『モンスーン文書』にみられる 17 世紀前半ポルトガル船のアジア交易—日本・マカオ・マニラの経済リンカー—』海域アジア史研究会例会報告要旨  
岡美穂子 2002「港市マカオ黎明期（1550-1650）の社会と経済—周辺海域との関係性から」東南アジア史学会第 68 回研究大会要旨  
国際日本文化研究センター 1993『エルミタージュ美術館所蔵日本美術品図録』日文研叢書 2  
坂井隆 1993「肥前陶磁の輸出と鄭氏・バンテン王国」『東南アジア歴史と文化』22  
坂井隆 1997「台湾のイマリ」『陶説』533  
坂井隆 2002『港市国家バンテンと陶磁貿易』同成社  
佐賀県立九州陶磁文化館 1990『海を渡った肥前のやきもの展』  
塩田町教育委員会 1998『上福 2 号窯跡調査報告書』  
謝明良 1996「左営清代鳳山県旧城聚落出土陶瓷補記」『台湾史研究』3-1 中央研究院台湾史研究所  
謝明良 2000「台湾安平と左營遺跡出土の陶磁器」『バンテン・ティルタヤサ遺跡発掘調査報告書』上智大学アジア文化研究所・バンテン遺跡研究会・インドネシア国立考古学研究センター  
謝明良・劉益昌・王淑津・顔廷仔 2003「記熱蘭遮城遺址出土の十七世紀欧州と日本陶瓷」  
George Kuwayama 2000'Chinese Ceramics in Colonial Peru' Oriental Art vol.XLVI No.1  
George Kuwayama and Anthony Pasinski 2002'Chinese Ceramics in the Audiencia of Guatemala'Oriental Art vol.XLVIII No.4  
中国歴史博物館水下考古学研究室・広東省博物館考古隊・海南

- 省博物館 1997「海南文昌宝陵港沈船遺址」『福建文博』1997.2 期  
上智大学アジア文化研究所 2000『バンテン・ティルタヤサ遺跡発掘調査報告書』  
野上建紀 1994「応法地区における窯業について」『有田町歴史民俗資料館・有田焼参考館研究紀要』第 3 号 p1-54  
野上建紀 1997「肥前における磁器産業について」『有田町歴史民俗資料館・有田焼参考館研究紀要』第 5 号 p1-53  
野上建紀 2000「磁器の編年（色絵以外）1. 碗・小坏・皿・紅皿・紅猪口」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会 p76-157  
野上建紀 2001「沈船資料にみる明末～清朝磁器」『貿易陶磁研究』No.21 p63-74  
野上建紀 2002a「海外輸出された肥前磁器」『近世日越交流史』柏書房 p317-331  
野上建紀 2002b『近世肥前窯業生産機構論』  
野上建紀 2003「沈船資料にみる肥前磁器の流通」『わたつみのタイムカプセル』九州・沖縄水中考古学協会 p8-11  
野上建紀・Alfredo B.Orogo・田中和彦・洪曉純 2005「マニラ出土の肥前磁器」『金大考古』48 号 金沢大学考古学研究室  
野上建紀・向井互 2000「東南アジア周辺の沈船遺跡」『日本貿易陶磁研究会第 21 回研究集会資料集』  
野上建紀・李匡悌・盧泰康・洪曉純 2005「台南出土の肥前磁器」『金大考古』48 号 金沢大学考古学研究室  
フォルカー 1979-1984「磁器とオランダ連合東インド会社」（1）～（47）井垣春雄校閲、前田正明・深川栄訳『陶説』312-370  
藤原友子 2000「古伊万里の道展について」『古伊万里の道』佐賀県立九州陶磁文化館 p143-165  
方真真 2003「明鄭時代台湾與菲律賓的貿易關係—以馬尼拉海關紀錄為中心」『台湾文献』第 54 卷第 3 期  
澳門海事署 1986『歴代澳門航海圖 Cartografia Nautica de Macau Atraves dos Tempos』  
三杉隆敏 1986『世界の染付 6』同朋社出版  
Mededelingenblad nederlandse vereniging van vrienden van de ceramiek 101/102 1981  
Museu de Macau1999,A Museum in an Historic Site-The Monte Fortress of St.Paul-  
村上直次郎訳注・中村孝志校注 1975『バタヴィア城日誌 3』東洋文庫 271 平凡社  
山脇悌二郎 1988「唐・蘭船の伊万里輸出」『有田町史』商業編 I 有田町史編纂委員会 p265-410  
Jan M.Baart2000「アムステルダムの日磁器出土遺物」『古伊万里の道』佐賀県立九州陶磁文化館 p206-220  
李匡悌 2004『三舍及社内遺址受相関水利工程影響範圍搶救考古發掘工作計劃』  
William M.Mathers and Nancy Shaw 1993'Treasure of the Concepcion'